

「小児がんを考える」

中学二年 O・A

私がなぜこのテーマを選んだのか。

それは、近い将来二人に一人が「がん」になるというショッキングな内容を、テレビや新聞などで見聞きする機会が度々あり、「がん」とは一体どんな恐ろしい病気なのだろうか、と漠然とした不安に駆り立てられた時があった。そんな時、NHKの「プロフェッショナル 仕事の流儀」道を開く、小さい命のために」というドキュメンタリー番組を見た。

それは、これまでにおよそ一万人にも及ぶ子どもたちの命を助けたという、小児集中治療医 植田育也先生の日常を描いたものだった。日本最大級のこども専門集中治療室（PICU）には、命に危険のある子どもたちが毎日運ばれてくる。病気だけではなく、やけどなど、火災や事故による重篤な患者も多い。子どもたちの命と真剣に向き合い、回復へのあらゆる可能性を模索し、容体が改善されない場合には、原因を追求し、決して幼い命の火を消さないという力強い先生の姿が描かれており、私は、先生の優しいながらも決して諦めないという姿に、強烈な印象を抱いた。植田先生はひげを生やしている。これには深い理由があった。過去に、入退院を繰り返していた十代の少年と、ある約束を交わしていたのだ。「退院する日まで一緒にひげを伸ばそう。」しかし、少年は「小児がん」という病で帰らぬ人となってしまった。それ以来、植田先生は一度もひげをそり落とすことができなくなってしまったのだ。私は、あの植田先生ですら克服できなかった病、ひげをそり落とせなくさせてしまった病、「小児がん」という「がん」に、とりわけ強く関心を持つようになった。

医療技術の向上により、救える命は増えてきたというものの、それでもまだなお助けられない命がある。この現実を目の当たりにしたことが、小論文で「小児がん」について考えてみたいと思った、大きなきっかけである。

私は、「小児がん」とはどういう病気なのか、何か学ぶことができないだろうかと考え、この夏二つのセミナーに参加した。

一つ目は、日本医科大学千葉北総病院で開催された「日本医科大学千葉北総病院 夏休み公開講座」小児がん支援のレモネードスタンド」というセミナーである。二つ目は、千葉県がんセンター研究所で開催された「がんの急所を突け！」遺伝子解析から治療薬を創る」というセミナーである。どちらのセミナーも、始めに「がん」「小児がん」に関する知識や現状についての講義があった。

毎年二〇〇〇人から二五〇〇〇人の子どもたちが「小児がん」と診断され、大人も含めたがん患者全体の約一％に相当する。「小児がん」の患者数は、がん患者全体から見ると、必ずしも多くはないが、三歳以上の子どもの死亡要因は、事故に次いで二位であり、やはり「小児がん」は深刻な病気なのである。しかし、今では医学の進歩によって抗がん剤治療が進み、国立がんセンターと千葉県がんセンターが、抗がん剤治療を共同開発しているという。その結果、小児がん患者の七〇％から八〇％が病を克服し、日常生活に戻ることができるようになったのである。いまや治る、治せる病気になりつつあるのである。とはいえ、まだ二〇％から三〇％の子どもたちに、日常を取り戻してあげることが難しいというのがこの病の現状である。これから待ちうけているであろう、楽しい子供時代や学生生活を十分に楽しむことができなくなるのである。いま私が日々何気なく送っている日常は、決して当たり前のことではないのだと、改めて痛感させられた。

小児がんは、幼い頃にかかるために、QOL (Quality of Life) (生活の質) が大きく低下する。同じ「がん」でも「小児がん」と「大人のがん」とは異なるのである。「大人のがん」の方が、かかる患者数が多いため、がん研究、がんの治療方法の研究などは遙かに進んでおり、一方、大人と比べると数の少ない小児がんの研究は、思ったほど進められていないのが現状である。(日本医科大学千葉北総病院小児科・海津聖彦先生)

「小児がん」の撲滅のためには、小児がんの研究や医療技術の開発、それに伴いたくさんのお金が必要である。医師、研究者によるがん研究のための研究費は、主に、私たちの税金から、補助金として、「科学研究費」という形で国から支払われている。子どもは抗がん剤や薬への感受性が高いため、今や七〇%から八〇%の子どもたちが治るところまできているが、研究費、治療薬の研究開発費が不足していることが、今後の課題のようである。

何か私にもできることはないだろうかと考えてみた。「小児がん」について学ぶことができた一方で、その支援の方法として、「レモネードスタンド」というものがあることを初めて知ることができた。しかし、なぜ「レモネードスタンド」が小児がん支援につながるのか、十分にはわからなかったので、自分なりに考えてみた。

「レモネードスタンド」の原点は、アメリカで小児がんと闘っていたアレックスという少女である。彼女は四歳になった時、「レモネードを売ったお金で病気の子どもたちを助きたい」という一心で、自宅の庭にレモネードスタンドを開くことを提案し、以来、近所の人々が次々とレモネードを買いにきてくれた。その運動は、次第に全米へ知られるようになり、支援の輪は広がっていった。アレックスは百万ドルを集めることを目標にしていたが、二〇〇四年八月、わずか八歳で亡くなった。その時点で集まった寄付は七〇万ドル以上にもなっていた。その後も彼女の遺志が引き継がれ、現在も活動は続いている。アレックスには好きな言葉があった。 ”When life

gives you lemons, just make lemonade. ”酸っぱいレモンをもらったら、甘くておいしいレモネードを作ればいいのよ。「アレックスはこの言葉通り、「小児がん」という困難にあっても、それをプラスに捉え、同じ病気で闘っている子どもたちに、夢と勇気を与えたのだった。私は、アレックス自身も病でありながら、同じようにつらい思いをしている人々を思いやる心の強さに深い感銘を受けた。

次に、私は「レモネードスタンド」を、新しい形の寄付であると考えた。寄付というのは、小児がん撲滅のために支援を呼びかけ、

共感した人から無償でお金などを集めることである。しかし、「レモネードスタンド」は、一杯一〇〇円のレモネードを買った人が、結果的に寄付をしているという、今までにない寄付の方法なのである。その仕組みは、一杯一〇〇円のレモネードから、「原材料費」、「販売するための場所、お店などの費用」、「レモネードを作って売る人の人件費」が支払えるようにしなければならぬが、これらの費用をボランティアでまかなえば、その分、利益が増えて、病院への寄付金が増える。二〇一六年一月二三日に横浜で開催された「レモネードスタンド」は、実際に小児がんになった子どもたち自身が開いた。また、がんで親族を亡くした遺族や、がんで苦しむ人たちを助けたいと共感する人たちが協力して開いているのである。いまでは、人が多く行き交う駅や学園祭など、少しずつ広がりを見せている。

これから先、さらに「小児がん」の治療方法を開発するためにはどうすればよいのだろうか。研究費を増やさなくてはならない。大変なことではあるが、私たちにも実行できそうなことがある。それは、「レモネードスタンド」の活動を促進していくことである。「レモネードスタンド」の運動が広がりを見せているとはいえ、頻繁に行われているとはいえない。そして、まだ「レモネードスタンド」というものを知らない人や、関心のない人がいるのも確かである。私が今回参加したようなイベントを色々な場所で開催し、「小児がん」、そしてその活動を認知してもらおう機会を多く設けることが大切であると考えている。

そして、科学研究費を増やすことである。財源は国民が出している税金であるので、国民への理解が必要になるが、「レモネードスタンド」の活動を通じて「小児がん」の研究に、科学研究費を振り向けることに対する賛成が多くなることが期待される。晃華学園でもこの活動に賛同する人を増やし、是非やってみることができるとよいと思う。たとえば文化祭など、人が多く集まる場所を活用すれば、「レモネードスタンド」の活動が普及し、今以上に賛同する人たちが増えるであろう。そして、その結果一人でも多くの人に活動を知

ってもらえるのである。

「レモネードスタンド」の活動で必要なのは、レモネードとそれら売る場所、活動に賛同する人々なのだ。私たちの何気ない小さな活動が、実は大きな力になるのである。私たちの運動で「小児がん」に苦しんでいる子どもたちの未来が明るいものになるのである。

私たちの「レモネードスタンド」を経験し、考え方に共感した人たちが、自ら身の回りで企画し、活動を広げていくことによって、徐々に普及していくと考える。